Mechthildのドイツ語
――神秘主義的語彙の発展――

須澤　通

キーワード：宮廷詩人語；神秘主義；借用造語；中心語彙

1．ドイツ中世後期のMystikerin（神秘主義者），Mechthild von Magdeburg（1207？～1282？）のMystik（神秘主義思想）は，自身の神秘的体験，宗教的経験という実存的経験に基いている。Mechthildは，彼女の書，„Das fließende Licht der Gottheit“[1]で，自らの「神体験（Gotteserlebnis）」を伝え，刺激的な宗教的経験を立証するため，「好ましからざる要因を含むことのない（nicht vorbelastet）」[2]斬新な表現手段を編み出すが，これによって彼女のドイツ語は，ドイツ文学がかつて経験したことのない卓越した表現力（Ausdruckskraft）を獲得することになる。

Mechthildの文には，中世盛期の宮廷文学独特の観念，および表現様式が見られる[3]。Mechthildがdeutsche Mystikを開花させた時，ドイツ宮廷文学の盛期を担った宮廷詩人たちはすでに舞台から去っていた。そこにはもはや，彼らの「高潔な心（hôher muot）」が根付く土壌はなく，彼らの「宮廷語（hovesprâche）」も「この台所（地上）では理解しえない宮廷ことば（die hovesprache, die man in dirre kuchin nut vernimet）」[4]となっていた。しかしMechthildの“Das fließende Licht der Gottheit”では，「神はこの台所では理解しえない宮廷ことばで魂に挨拶し，宮廷で着る衣装を魂に着せる（So grusset er si mit der hovesprache, die man in dirre kuchin nut vernimet, und kleidet su mit den kleidern, die man ze dem palaste tragen sol）」[5]のである。

Mechthildの文表現の特徴である，「愛（愛する人）が奪い取る，苦しめる」のようないわゆるMinneklage（ミンネの嘆き）は，宮廷詩人の抒情詩における特徴的な表現形式でもある[6]。

ir hant mir alles benomen, das ich in ertrich ie gewan.　(Mechthild I, 1, 8 f.)
（あなたは私がこの地上で得たすべてのものを私から奪い取られました）
Frowe minne, ir hant mich also sere betwungen, das min licham ist komen in sunderlich krankheit.　(Mechthild I, 1, 17 f.)
（ミンネ様，あなたは私の体が特異な病に倒れるほどひどく私を苦しめました）

Werlt, ich hân dînen lôn ersehen: swaz dû mir gîst, daz nimst dû mir.
(Walther von der Vogelweide L. 67, 8 f.)[7]
（浮世よ，私はそなたのお返しとやらを見せてもらった，そなたは私に与えたものをことごとく奪い取るのだ）

Süeze Minne, sît nâch dîner süezen lêre mich ein wîp alsô betwungen hât,
(Walther von der Vogelweide L. 109, 22 f.)
（愛しきミンネよ，そなたの甘美なる教えに従って，あるご婦人が私をひどく苦しめたのだから）

Mechthildが，神と人間を対比する表現手段として用いたAntitheseや，花婿（brutegom）となった神と彼の花嫁（brut）として登場する人間（＝Mechthild）の愛の関係を示すため使用したOxymoronも，まさに宮廷詩人たちにより，文体上のあやとして洗練され，高度な芸術的文体にまで発展した宮廷的表現形式そのものである[8]。

und des blumen fruht ist ein untotlich got und ein totlich mensche und ein lebende trost des ewigen libes, (Mechthild I, 22, 5 f.)
（その花の果実は死することのない神，死すべき定めの人間，そして永遠の命の生ける慰めである）
in dem schonsten liehte ist si blint an ir selber und in der groston blintheit siht si allerklarost. In der grosten klarheit ist si beide tot und lebende. Ie si langer tot ist, ie si vrolicher lebt. (Mechthild I, 22, 9 ff.)
（この上なく美しい輝きの中で彼女自身見えなくなってしまったが，全く見えない中で彼女にははっきりとものが見えた。このはっきりと見える状態において彼女は死してなお生きているのである。彼女の死が長ければ長いほど彼女の生は幸せになる）

Ir leben, ir tôt sint unser brôt. sus lebet ir leben, sus lebet ir tôt. sus lebent si noch und sint doch tôt und ist ir tôt der lebenden brôt. Und swer nu ger, daz man im sage ir leben, ir tôt, ir vröude, ir clage, der biete herze und ôren her (Tristan 237 ff.)[9]
（彼らの生，彼らの死は私たちの命の糧である。こうして彼らの生は生き，彼らの死は生きる。こうして彼らは今なお生き，実際には死して，彼らの死は生きる者の命の糧となる。今，彼らの生，彼らの死，彼らの喜び，彼らの苦しみが語られるのを聞きたいと思う者は，心と耳を貸されるがよい）

Mechthildは彼女の実存的体験に基く特異なMystikを的確に表現するために，新しい概念を表す語彙を必要とした。彼女の文にはラテン語からの翻訳借用語（Lehnübersetzung）を中心としたMystik独特の抽象語彙が数多く見られる。そのうち彼女の語彙の特徴として，ent-，über-，ver-，vol-をPräfixとして利用した抽象語彙とともに，彼女のnegative Theologieに必須なPräfixのun-，Suffixの-losを用いた形容詞をあげることができる[10]。
unbegrifelich（捉えることのできない），unsprechelich（口では言い表せない），
endelos（果てることのない），grundelos（底知れぬほど深い）

このほかに彼女はSuffixの-heit／-keit，-unge，-nisseを付した新造語を積極的に用いて

いる[11]。

kuschekeit（Keuschheit 貞節），beschowunge（Anschauung 観想），bekantnisse（Kenntnis 知恵）

Mechthildのこのような語彙使用については，deutsche Scholastik（ドイツスコラ学派）の翻訳文学におけるLehnprägung（借用造語）の影響が指摘されている[12]。しかしこれら，Mechthiltの特徴的造語手段とされるものは，実際には中世盛期の宮廷詩人たちにより，彼らの宮廷的理想概念を生み出す造語方法として確立された，あるいはその過程にあるものでもある[13]。

MechthildのMystikの根源にあるものは神と人間の関係であり，中心テーマは神と魂の神秘的な一致，愛の純化の段階における苦難，そして謙虚な賛美である。ここにおけるMechthildの神に対する姿勢は「神に対する賛美」，「神への愛」で終始一貫している。この様な中心思想を表現するため，彼女は注意深く語彙を選択し，ここに，それにふさわしい概念を注入する。以下にMechthildの中心思想を表す語彙「Leitwörter（中心語彙）」のうち，特に重要と思われる三つの語彙，towe，grunt，einungeについて，ここに含まれる「中心概念」を中心に，ドイツ中世盛期の宮廷文学におけるドイツ語と比較し，その特徴を考察する。

2. Mechthildの文には，写実的・具体的な具象表現によって，心的な陶酔状態を強調する文体のほか，抽象的・非感性的な精神性（Geistigkeit）を鮮明にする効果を狙った表現法が見られる。その代表的な例としてder towe（der Tau 露）を用いた絵画的（bildhaft）な描写をあげることができる[14]。

Ich kum zu miner lieben als ein *towe* uf den blumen. (Mechthild I, 13, 2)
（わたしは花の上にかかる露のようにわたしの愛するひとのもとへ行く）

この文は箴言（Aphorismus）の形で用いられている。Mechthildはこの文に一切説明を加えない。この様な描写は，事象・状況をより詳細に表現し，その内容をより明快にする効果を狙ったAllegorie（アレゴリー）やMetapher（隠喩）とも異なる。
ここでは，意味の解釈をコンテクスト（Kontext）に求めることも不可能である。この文とこれを囲む文領域（Sphäre）において，この文意を理解する唯一の手掛かり（Anhaltspunkt）は，上部ドイツ語（Oberdeutsch）訳テキストが依拠した版の編集者（恐らくはHeinrich von Halle）によって設けられた章のタイトル『神はどのようにして魂のもとへ来るか（Wie got kumet in die sele)』のみである[15]。

Mechthildの書には，この他にもder toweを用いた文が見られる。

Der susse *towe* der unbeginlicher drivaltekeit hat sich gesprenget us dem brunnen der

ewigen gotheit in den blumen der userwelten maget, und des blumen fruht ist ein untotlich got und ein totlich mensche und ein lebender trost des ewiggen libes (Mechthild I, 22, 4 ff.)

（初めのない三位一体の甘美な露は，永遠の神性の泉から，選び抜かれた乙女の花に注がれた。その花の果実は不死の神であり，死すべく定めの人間であり，永遠の生の生ける慰めである）

Jhesus gieng dur dinen lip als der *towe* dur die blumen, also das dinu kuscheit nie wart betruret (Mechthild III, 4, 13 f.)

（イエスは，あなたの純潔に触れないように，露が花に染み透るようにあなたのからだに染み透られた）

O grosser *to* der edelen gotheit, o cleine blume der sussen maget, o nutzu fruht der schonen blumen (Mechthild V, 20, 2 f.; VII, 18, 3 ff.)

（ああ，高貴な神性の大いなる露よ，ああ，愛しき乙女の優美なる花よ，ああ，美しき花の益ある果実よ）

以上の用例における der towe を伴った描写は，いずれも聖母マリアに関するものである。しかし，ここでは，der towe そのものについての説明はない。つぎの用例では，der towe は汚れを浄化し，悲痛を取り除く効果を持つ。

Eya min einiges gut, nu hilf mir, das ich unbefleket moge vliessen in dich! ...Eya lieber Jhesu Christe, nu sende mir den sussen regen diner menscheit und die heisse sunnen diner lebendiger gotheit und den milten *towe* dines heligen geistes, das ich verklage min herzeleit (Mechthild IV, 5, 8 ff.)

（ああ，わたしの唯一の善性よ，わたしが汚れなくあなたの中に流れ込むことができるようにお助け下さい！ ...ああ，愛するイエス・キリストよ，わたしの悲嘆が克服されるように，わたしにあなたの人性の甘美な雨，あなたの生ける神性の熱き太陽，そしてあなたの聖霊の慈悲深い露をお送り下さい）

このような『露』の働きは，天から降りた滴のように表現を変えて説明される。

Nu bitte ich dich, vil lieber vatter, mit allen dinen vrunden, das din susse *himmelval*, der hernider gusset ane underlas us dem grundelosen lebendigen brunnen diner ganzen heligen drivaltekeit, musse mine sele reinigen ane underlas von allen vlecken per dominum nostrum (Mechthild VI, 2, 32 ff.)

（心から愛する父よ，あなたにお願いします，全てのあなたの友と共に，聖なる三位一体の無限の生ける泉から尽きることなく滴り落ちるあなたの甘美な天国の滴が，わたしたちの主のために，わたしの魂のあらゆる汚れをたえず清めてくださいます

よう）

Mechthildの思想とことばに大きな影響を与えた『旧約聖書』においても，der Tau（露）は，聖書の中心思想を示すLeitwortとして用いられている。ここでは，天から地に降りた『露』は，多くの場合，穀物や草花を生産し，人々に広く恵みを与える力を持つものとして描かれる。

Gott gebe dir vom *Tau* des Himmels und von der Fettigkeit der Erde und Korn und Wein die Fülle (Das 1. Buch Mose 27, 28)[16]

（神があなたに天の露と，大地の肥沃と，穀物とワインを豊富に賜りますように）

Und am Morgen lag der *Tau* um das Heer her. Und als der *Tau* weg war, siehe, da lag's in der Wüste rund und klein wie der Reif auf dem Lande. ...Mose aber sprach zu ihnen: Es ist das Brot, das euch der Herr zu essen gegeben hat (Das 2. Buch Mose 16, 13 f.)

（そして朝になると，宿営の周りに露が降りた。露が消えた後，何と，荒野には地表に降りた霜のように丸く小さなものが残された。...モーゼは彼らに答えて言った：これは主があなた方に食物として賜ったパンである）

und die Erde höre die Rede meines Mundes. Meine Lehre triefe wie der Regen, und meine Rede fließe wie *Tau*, wie der Regen auf das Gras und wie die Tropfen auf das Kraut (Das 5. Buch Mose 32, 1 f.)

（大地よ，わたしの口のことばを聞け。牧草の上に降る雨のように，草地に滴る雫のように，わたしの教えは雨のように降り注ぎ，わたしのことばは露のように流れるであろう）

Die Ungnade des Königs ist wie das Brüllen eines jungen Löwen; aber seine Gnade ist wie *Tau* auf dem Grase (Die Sprüche Salomos 19, 12)

（王の怒りは若い獅子のほえるようであるが，彼の慈悲の心は牧草に降る露のようである）

gerne will ich sie lieben; denn mein Zorn soll sich von ihnen wenden. Ich will Israel wie ein *Tau* sein, daß er soll blühen wie eine Rose, und seine Wurzeln sollen aus ausschlagen wie der Libanon (Der Prophet Hosea 14, 5 f.)

（わたしは喜んで彼らを愛するつもりだ，わたしの怒りを彼らから離そう。わたしはイスラエルに対して，彼がバラのように花咲き，レバノンのように根を張ることが出来るよう，露のようになろう）

これに対して，中世盛期の宮廷文学におけるder touweには，全く異なる美学的（ästhetisch）

コノテーション（Konnotation）が含まれる。ここでは，der touwe は花（特にバラ）と結び付き，清らかで，美しく，はつらつとした，若々しいものに対する最高の賛辞として用いられている。宮廷叙事詩では 特に „Parzival“ に多くの用例が見られる。Parzival の妻となる美しき乙女 Condwîr âmûrs の完全性についてはつぎのように形容される。

gein der meide diu hie saz, an der got wunsches niht vergaz (diu was des landes vrouwe), als von dem süezen *touwe* diu rôse ûz ir bälgelîn blecket niuwen werden schîn, der beidiu wîz ist unde rôt (Parzival 188, 7 ff.)[17]

（ここに座っていた乙女，彼女に神は何一つ欠けることない造化の極みを尽くした〈彼女はこの国の女王であった〉。それはあたかも，甘美なる露を受けてバラが小さな蕾からみずみずしい高貴な輝きを，そう，白く同時に赤い輝きを放つかのようであった）

この直喩法（Vergleich）の対象は女性とは限らない。Parzival の美しさもこの表現によって形容される。

der was gevar durch îsers mâl als *touwege* rôsen dar gevlogen (Parzival 305, 22 f.)

（彼は，甲冑の鉄錆による汚れの間から，露にぬれたバラがそこに撒かれたような〈肌の〉美しさをたたえていた）

この表現はしかし，高貴な乙女，女王 Belakane には適用されない。なぜなら彼女は肌の色の黒い異教徒だからである。

si hete wîplîchen sin, und was aber anders ritterlîch, der *touwegen* rôsen ungelîch. nâch swarzer varwe was ir schîn (Parzival 24, 8 f.)

（彼女は女性のやさしい心を持ち，その他にも高貴で優れていたが，露にぬれたバラには程遠かった。なぜなら彼女の肌は黒かったから）

„Tristan“ では，der touwe は花を生き生きと爽やかにする。

swer dô dâ bî der maere was und ez rehte in sîn herze las, dem süezete diu rede den muot rehte alse des meien *tou* die bluot (Tristan 8305 ff.)

（そこで，この話の場所に居合わせ，心に刻むように聞き入った人を，その話の内容は，まるで五月の露が花を生き生きとさせるように，爽やかな気分にした）

Walther von der Vogelweide の抒情詩でも，der touwe によって色鮮やかに輝きを増す花（バラ）は，新鮮な美しさ，華やかさの比喩として用いられる。

Liljen unde rosen bluomen, swa die liuhten in meien *touwen* durch daz gras, und

kleiner vogele sanc, daz ist gein solher wünnebernden fröide kranc, swa man ein schoene froun siht (Walther von der Vogelweide L. 27, 20 ff.)

（5月の露を受け，草の中から顔を出し美しく輝くユリやバラの花，そして小鳥たちの歌声，これらは美しい婦人を目にした時のあの幸せな気持ちを与えてくれる喜びと比べたら，無に等しい）

din kiuscher lip git wünneberndez hohgemüete, din munt ist roeter danne ein liehtiu rose in *touwes* flüete (Walther von der Vogelweide L. 27, 28 ff.)

（汚れなきあなたは幸せな気持ちをもたらす悦ばしき思いを与えてくれる，あなたの口は露に濡れて鮮やかに輝くバラよりなお一層赤く輝いている）

Minnesang（ミンネザング）後期の詩人で，多作の文筆家 Konrad von Würzburg の叙情詩では，der touwe は，バラのかたい蕾の上に落ち，花を開かせる。

Tou mit vollen aber triufet ûf die rôsen âne tuft, ûzer bollen schône sliufet manger lôsen blüete cluft (Konrad v. Würzburg 20, 1 ff.)[18]

（露は絶え間なく，繰り返し，霜をまぬがれたバラの上に滴る，すると蕾から優美な花の唇がつぎからつぎと華麗に開き出した）

彼のマリア賛歌 „Goldener Schmiede“（黄金の鍛治）では，天国の露に濡れたバラは聖母マリアを描写する。

du rose in *himeltouwe*, von gotes geiste erfiuhtet (Goldener Schmied 1908 f.)[19]

（あなた，神の聖霊によって濡らされた，天国の露に抱かれたバラ）

Konrad von Würzburg のこの描写は，Mechthild の聖母マリアに関する描写と重なる。『旧約聖書』で，渇いた大地に天から降りて，穀物や草花を産み出し，人々に広く恵みを与える力を持つものとして描かれた『露』は，宮廷詩人においては，清純・無垢の Symbolik として，優美の Symbolik である花（バラ）と結び付き，若く，清らかな美を表現する。Minnesang 後期の詩人 Konrad von Würzburg では，der touwe は，これらの概念を統合し，花の蕾に滴り，これを「清純」で包み，花開かせる力を持つ。ここでは，露に濡れたバラは，処女のまま御子を授かった聖母マリアを表す。

Mechthild の Mystik の中心テーマは魂と神の神秘的な一致である。この章の冒頭の言葉

Ich kum zu miner lieben als ein *towe* uf den blumen. (Mechthild I, 13, 2)

（わたしは花の上にかかる露のようにわたしの愛するひとのもとへ行く）

のように，神は，愛するひと（神性を求めて渇く魂）の中に，der towe のごとく，これを

傷つけ汚すことなく（der towe の純潔性），深く流れ込む（der towe による彼女の中心観念 Fließen〈流れ〉の Symbolik）[20]。この神の愛によって，魂は清らかに，美しく，聖なるものになる。

> Du solt bitten, das dich got minne sere, dikke unde lange, so wirdest du reine, schone und helig (Mechthild I, 23, 1 f.)
>
> （神があなたを激しく，常に，長く愛してくださるよう祈りなさい。そうすれば，あなたは，清らかに，美しく，聖なるものになります）

神に愛され，内に「神」を得た魂は，花が「露」の滴りによって「開花」を促されるように，魂の「本性」を得る。

> Frowe sele, ir sint so sere genaturet in mich, das zwuschent uch und mir nihtes nit mag sin. (Mechthild I, 44, 82 f.)
>
> （魂婦人よ，あなたはわたしの本性へと完全に一致しているので，あなたとわたしの間にはいかなるものも入り込むことが出来ない）

ここでいう魂の「本性」は「わたし（神）の本性と完全に一致している」，すなわち「神の本性」そのものである。„naturen“ は Mechthild による新造語で「神の本性と溶け合い一致する」の意味を持つ。以上の考察から，Konrad von Würzburg 同様「純潔性」と「生産性」の概念を統合した Mechthild の der towe に関して，これを「神の本性（gotliche nature）」の Symbolik とみなすことができる。

3. Mechthild の中心思想を表す Leitwort であるとともに，Meister Eckhart など，ドミニコ修道会士（Dominikaner）の神秘思想を表す重要な Leitwort でもある „grunt“ は，ゲルマン語時代から見られる古い語彙である。Ahd.（古高ドイツ語）では「大地，土地（Boden, Erde）」の意味で用いられたが，Mhd.（中高ドイツ語）では，「底（Grund）」の意味を得[21]，Mechthild や Eckhart では「精神的な深み（Tiefe）」，「心の深淵（Grund des Herzens）」の概念を持つ。

> Aber unser vrowe was vil stille, do unser herre von dem tode uferstunt also erliche, doch hette ir herze an gotlicher bekantnisse vor allen menschen den tiefosten *grunt*. (Mechthild V, 23, 188 ff.)
>
> （しかしわたしたちの聖母は，わたしたちの主が死からかくもりっぱに復活された時，全く動じることはなかった。しかし，彼女の心は，神の認識という点で，他の誰よりも最も深い深淵を持っていた -最も深いところで神を認識していた-）

> Fro helikeit, koment har zu mir und kussent miner selen munt und wonent in mines herzen *grunt*. (Mechthild I, 44, 82 f.)

（聖性婦人よ，わたしのところに来て，わたしの魂の口に口づけして，わたしの心の奥深くに住みついてください）

Mechthildでは，grunt はPräfix や Suffix を伴い，多くの派生語を形成する。

abgrunt（奈落の底）：

und leitent uns verblendet in die siben hobtsunde. War gat denne der weg hin denne in das ewig *abgrunde*? (Mechthild III, 7, 14 f.)

（彼らはわたしたちの目をくらませ，7つの大罪へと導く。いったいこの道は永遠の奈落の底以外，どこへ通じていようか？）

grundelos（底知れぬ）：

Das ist *grundelos*, das got den sunder ansihet fur einen bekerten menschen; (Mechthild VI, 17, 3)

（神が罪人を回心した人とみなすことは，底知れぬ広さです）

gruntvestung（根源）：

Du bist ein *gruntvestunge* mines gotlichen flusses, (Mechthild V, 7, 2)

（あなたはわたしの神聖の流れの根源である）

Mechthildによって精神性を獲得したgrunt は，Meister Eckhart において，さらにその概念を発達させ，文字通り，彼のMystik の「根源」を表現するLeitwort となる。

Dâ der vater sînen sun gebirt in dem innersten *grunde*, dâ hât ein însweben disiu natûre. Disiu natûre ist ein und einvaltic. (Meister Eckhart: Predigt Q 5b)[22]

（父が最も内なる深淵で自分の子を生むところでは，その中にこのひとの本性が漂うように入り込むのである。この本性は一つで単一である）

Hie ist gotes *grunt* mîn *grunt* und mîn *grunt* gotes *grunt*. Hie lebe ich ûzer mînem eigen, als got lebet ûzer sînem eigen. ...Ûzer disem innersten *grunde* solt dû würken alliu dîniu werk sunder warumbe. (Meister Eckhart: Predigt Q 5b)

（ここにおいて神の深淵はわたしの深淵であり，私の深遠は神の深淵である。ここで神がご自身の本性から生きるようにわたしもわたしの本性から生きるのである。...この最も内なる深淵からあなたはあなたのすべての行ないを，何故と問うことなく行わなければならない）

このような精神性を獲得したgrunt の概念は，すでにMhd.の宮廷詩人たちにおいても見られる。

mahtû des, herre, bilde geben daz dir aller herzen *grunt* ist gesihteclîchen kunt (wan dir enmac niht verborgen sîn) (Erec 5803 ff.)[23]

（主よ，あなたが，あらゆる人の心の奥底まであなたにはお見通しであるということ

を示されれば -なぜならあなたには何も隠すことが出来ませんから-)

ein kus in liebes munde, der von des herzen *grunde* her ûf geslichen kaeme, ôhî waz der benaeme seneder sorge und herzenôt! (Tristan 12353 ff.)

(胸の奥底から忍ぶように上って来る，愛する人の口による口づけは，ああ，何とたくさんの恋の不安と心痛を取り除いてくれることか)

„Tristan"では，すでに abgründe，grundelos の派生語も見られる。

wan daz si mit dem wilden sê ûf als in den himel stigen und iesâ wider nider sigen als in daz *abgründe*. (Tristan 2426 ff.)

(彼らが，荒れ狂う海と共に，天に上るかのように上がり，すぐにまた，奈落の底に沈むかのように沈むこと以外)

und mit im überwinden die *grundlôsen* herzenôt, diu uns beswaeret alse der tôt. (Tristan 9362 ff.)

(そしてそのひとの力で，わたしたちを死ぬほど苦しめている底知れぬ心痛を克服する)

Walther von der Vogelweide の抒情詩にも，「心の奥底」の意の grunt と派生語 abgründe の用例が見られる。

sît got enheine sünde lât, Die niht geriuwet zaller stunt hin abe unz ûf des herzen *grunt*. dem wîsen ist daz allez kunt, daz niemer sêle wirt gesunt, diu mit der sünden swert ist wunt, sin habe von *grunde* heiles funt. (Walther von der Vogelweide 6, 10 ff.)

(なぜなら神は，常に心の奥底まで悔いることのない罪を許されることはないから。賢いひとは全て知っている，罪の刃によって傷ついた魂は，奥底から救済を見出せないなら，決して癒されることがないことを)

die sinne ûf manege sünde der fürste ûz helle *abgründe* uns hât verleitet sêre. (Walther von der Vogelweide 3, 10 ff.)

(地獄の底の王は，わたしたちの心をたくさんの罪へとひどくそそのかした)

4. すでに述べたように，Mechthild の Mystik の中心テーマは魂と神の神秘的な一致である。ここでは，魂の本性は神の本性と溶け合い，完全に一致する (ir sint so sere genaturet in mich I, 44, 82 f.)。einunge「一致」は，Mechthild の Leitwörter の中で，最も多く用いられる語彙の一つである。

So ist si gar verwunden in die wunderlichen drivaltekeit mit hoher *einunge*.
(Mechthild I, 5, 6 f.)
（彼女 -魂- は，高貴な一致によって，素晴らしき三位一体の奥深くへと包み込まれている）

o du smelzender got an der *einunge* mit dinem liebe, (Mechthild I, 17, 3 f.)
（ああ，あなたの愛するものと一致して溶けあう神よ）

herre, die *einunge* die ich denne begriffe in dinem willen, herre, die stetekeit die ich denn behalte nach diner gabe, herre, die sussu gehugnisse als ich din gedenke, herre, die verwenete minne, die ich zu dir habe, die ist in ir selben also rich und vor dinen gottes ogen also gros, (Mechthild V, 31, 14 ff.)
（主よ，あなたの御心の中でわたしが受ける一致，主よ，あなたの賜物によりわたしが持ちつづける変わらない気持ち，主よ，わたしがあなたのことを考える時の甘美な回想，主よ，わたしがあなたに抱く心地よい愛，これはそれ自身とても豊かで，あなた神の目の前でも大変大きいのです）

so wirt si denne mit got ein got, also das er wil, das wil si und si mogent anders nit vereinet sin mit ganzer *einunge*. (Mechthild VI, 1, 102 f.)
（こうして魂は神と一緒に一つの神になる，したがって神が望むものは魂も望む，さもなければ彼らは完全なる一致によって一つになることは出来ない）

神と人との「一致（einunge)」は，Meister Eckhart でも見られる。

und dô bleip im got, dâ got istic ist sîn selbes, ...denne in einer isticheit, daz got in im selber ist. Er gap gote nie niht, noch er enpfienc nie niht von gote ; ez ist ein und ein lûter *einunge*. Hier ist der mensche ein wâr mensche,
(Meister Eckhart : Predigt Q 12)
（神は純粋に神自身であるので，...神が神自身の中に存在するという純粋な存在において，神は彼 -聖パウロ- に残ったのである。彼は神に何一つ与える事はなかったし，神から何一つ受け取ることもなかった。それは一つであり，純粋な一致である。ここにおいて，人はまことの人である）

einunge のように，Suffix の-unge を伴った派生語は，行為・行為の結果を示す動詞的抽象名詞をつくる Mechthild の特徴的な造語手段で，中世盛期の宮廷文学ではまだ多くは見られない[24]。しかし，この einunge（一致，一体化）の用例は，宮廷詩人の Gottfried von Straßburg と Walther von Vogelweide にそれぞれ1例を見ることが出来る。このうち，Gottfried では Tristan と Isolde の愛する二人による精神的，肉体的な一体化の意味で用いられるが，Walther における einunge は三位の一体という宗教的な意味を持つ。

wer haete ouch dise beide von dem gemeinem leide vereinet unde bescheiden, wan *einunge* an in beiden, der stric ir beider sinne? (Tristan 12171 ff.)

（彼ら二人の深い結びつきと，二人の心のつながり以外に，誰がこのふたりを共通の悩みから解放し，切り離すことが出来たであろうか）

der jehen wir : mit driunge diu drie ist ein *einunge*, ein got der hohe here.

(Walther von der Vogelweide 3, 4 ff.)

（その方 -三位一体- にわたしたちは告白します，三位をもってしてこの三つは一体であり，高く気高い一人の神であると）

5. Mechthild の Mystik は Meister Eckhart の思弁的書下ろしと異なり，自身の実存的経験から語られたものである。彼女の文章はかつてない表現力を獲得したが，その神秘思想は，異端に陥る危険を孕む，特異性，特殊性を含むものでもあった。

Mechthild のドイツ語に関しては，これまでの研究によって，ドイツ中世盛期の宮廷文学との共通性・類似性が指摘されている。Norbert Richard Wolf は，Mechthild の韻・リズムの詩形式，表現様式に関して，これを Rätsel などの大衆文学の影響とする一方，彼女のことばには，新プラトン学派や旧約聖書の Hohelied（雅歌）の影響とともに，宮廷文学の表象の世界（Bildwelt）についての知識をうかがわせるものがあると述べている[25]。Hans Eggers も，Mystiker と宮廷文学における言語の類似性を強調することには警鐘を鳴らしながらも，Mechthild と宮廷文学の両者における言語の一定の共通性・類似性については，これを認めている[26]。

Mechthild は Magdeburg の高貴な騎士の家系出身であるとされる[27]。1207年頃～1282年頃を生きた Mechthild は，ドイツ語と瞑想的に取り組むために必要な一定の条件を，ドイツ中世盛期の宮廷詩人の言語芸術や精神的語彙から得ることのできる環境にはあった。

これまで見てきたように，彼女の詩形式，表現様式はその内容と表現において，宮廷文学と多くの点で共通性を持ち，また造語法においてもここに手本を求めることが出来る。しかし何より，両者の共通するところは，彼らの立脚する精神的基盤である。

中世盛期の宮廷詩人と中世後期のMystikerを結び付けるものとして，Charakterfestigkeit（志操堅固），Selbstdisziplin（自己規律）のほか，人間の道徳的責務に対する厳格な考えかた，日常性を凌駕した精神性があげられる[28]。さらにこれらの基盤をなす両者共通の精神的中心概念は，「自我」すなわち „eigenes Ich“ を強く知覚するところにある[29]。宮廷詩人の Minne は個人的体験に基き，Mechthild の「神との一体化」も個人的な体験を基礎とする。「自我」の発見と知覚，この全く新しい体験的自我と，これが個人的に向かい合う「汝」（das Du）と向き合う姿勢も両者共通である[30]。

神と魂の神秘的な一致という個人的体験を，自身のMystikの中心テーマとするMechthildが求める精神性（Geistigkeit）と，精神的中心概念は，中世盛期の宮廷詩人たちが獲得した，あるいは，ここに芽生えつつあったそれと共通するものであった。本論で扱った，Mechthild の Mystik における Leitwörter（中心語彙），towe，grunt，einunge が内包する「中心概念」についても，宮廷詩人がこれらの語彙に与えた内容と共通の精神的基盤を持つ。これら

の語彙の意味内容に関して，Mechthildと宮廷詩人における類似性・共通性は，両者のdas Ich（eigenes Ich）が向き合う対象das Duの違いこそあれ，両者が共通の精神的基盤において，精神的内容を共有していた結果であると結論付けることが出来る。

註

1) Hans Neumann: Mechthild von Magdeburg »Das fließende Licht der Gottheit« Bd. I.: Text. München1990.
2) Fritz Tschirch: Geschichte der deutschen Sprache, 2. Teil, 2. Aufl., Berlin 1975. S. 81.
3) 須澤　通：「Mechthildのドイツ語と宮廷詩人語」信州大学人文学部，人文科学論集<文化コミュニケーション学科編>第38号，2004年，11～21頁を参照。
4) Mechthild von Magdeburg: Das fließende Licht der Gottheit I, 2, 10.
5) Ebd., I,2, 9 ff.
6) 須澤　通：14頁
7) Die Lieder Walters von der Vogelweide. Unter Beifügung erhaltener und erschlossener Melodien neu hrsg. v. Friedrich Maurer, 1 Bändchen: Die religiösen u. die politischen Lieder, 3., durchgesehene Aufl., Tübingen 1967
8) 須澤　通：15頁
9) Gottfried von Straßburg: Tristan, nach dem Text v. Friedrich Ranke, neu hrsg. ins Nhd. übers. mit einem Stellenkommentar und einem Nachwort v. Rüdiger Krohn, 3. durchges. Aufl. Stuttgart 1984.
10) 須澤　通：17頁
11) Ebd.
12) Hans Eggers: Deutsche Sprachgeschichte. Bd. 1. Das Althochdeutsche und das Mittelhochdeutsche. Hamburg 1986, S. 462.
13) 須澤　通：17～19頁
14) Paul Michel: Durch die bilde über die bilde. Zur Bildgestaltung bei Mechthild von Magdeburg. In: Abendländische Mystik im Mittelalter, Symposion Kloster Engelberg 1984. Hrsg.v. Kurt Ruh, Tübingen 1986, S. 510 ff.
15) Ebd., S. 511.
16) Die Bibel oder die ganze Heilige Schrift des Alten und Neuen Testaments nach der deutschen Übersetzung D. Martin Luthers, nach dem 1912 vom Deutschen Evangelischen Kirchenausschuß genehmigten Text
17) Wolfram von Eschenbach: Parzival, nach der Ausgabe v. K. Lachmann, Übersetzung u. Nachwort v. Wolfgang Spiewok, Stuttgart 1997.
18) Kleinere Dichtungen Konrads Würzburg. Hrsg. v. Edward Schrüder mit einem Nachwort von Ludwi Wolff, III Die Klage der Kunst, leiche Lieder und Sprüche, Dublin/Zürich 1970
19) Vgl. Paul Michel: a. a. O., S. 512.
20) Ebd., S. 514.
21) Sprachgeschichte. Ein Handbuch zur Geschichte der deutschen Sprache und ihrer Erforschung. Hrsg. v. W. Besch/O. Reichmann/S. Sonderegger. Zweiter Halbband, Berlin/New York 1985, S. 1326.
22) Meister Eckhart: Deutsche Predigten. Eine Auswahl. Auf der Grundlage der kritischen

Werkausgabe und der Reihe 〈Lectura Eckhardi〉, hrsg. u. übers. u. komment. v. Uta Störmer - Caysa, Stuttgart 2001.

23) Hartmann von Aue : Erec. Hrsg. v. A. Leitzmann 5. Aufl. besorgt v. L. Wolff. Tübingen 1972.

24) 須澤　通：18頁

25) Moser/Wellmann/Wolf : Geschichte der deutschen Sprache, Bd. 1. Althochdeutsch Mittelhochdeutsch. Von Norbert Richard Wolf, Heidelberg 1981, S. 186.

26) Hans Eggers : a. a. O., S. 464.

27) Die deutsche Literatur des Mittelalters Verfasserlexikon, Bd.6, 1987 Berlin/New York S. 260

28) Hans Eggers : a. a. O., S. 464.

29) Ebd., S. 465.

30) Ebd.